

2007

5

(通巻第0号)



月刊

ラジオデイズ

声には、
人の体温があり物語がある

世界同時

ラジオデイズ宣言!

Woo 授業をさぼって。

この歌い出しで始まる忌野清志郎にハマった。それも、三十路を過ぎてからである。ぶつけられてどてっ腹が大きくへこんだ俺のボンコツのシビックには、エアコンもなければパワステもなかった。だから夏は手回しのウインドウを全開にして、道路の騒音に悩まされながら渋谷、青山、六本木を走った。左手にハンドル、右手に団扇の粋なドライビングスタイルである。そんな時はポリウレムをめいっばい上げて、カセットテープに入っている「トランジスタ・ラジオ」を車内に響かせた。

「トランジスタ・ラジオ」という語感が好きであった。鼻を衝くような郷愁とともに、すっと身体に入ってきた。中年の入口に入っていく日々の合間に、フラッシュバックのように「寝転んでいた陽のあたる場所」や「あくびをして目を小さくした教室」の風景が甦る。

友人と始めた仕事が順調に進み、すこし小金もできるころに、俺のシビックはエアコン付の真っ赤なマツダファミリアに替わっていた。そのころにはもう清志郎を聴くことはあまりなかった。いや、アップテンポでリズムを刻む音からすこしずつ遠ざかり、通勤の車の中で聴くのは「大沢悠里ののんびりワイド」だったり「高嶋ひでたけのお早う! 中年探偵団」だったりした。彼らを毎日飽きもせず聴くことで芳醇な加

齢臭が身についてきた。

知命を過ぎたころからは、もっぱら落語や講談を聴くようになった。以前にはまったく興味のなかった人情噺がやけに沁み入るようになった。こういつた噺がわかりはじめるにはやはり「のんびりワイド」を聴き続けるような倦怠と忍従の時間を潜り抜ける必要があったということである。蛇は脱皮を繰り返して成長してゆくが、俺もまた脱皮するように車乗り替えながら、少しずつ成長してきたのだろうか。(いや、そうやって蛇蝎の如き嫌われ爺になっていくのだ)俺の車はBMWになっていった。(ね、嫌味でしょ。)まあ、自転車だけとき。車はどうしたかってか。いや、免許取消しで、鮫洲通いの身分なのである。

さて、そろそろ読者が怒りだすころだろう。なにが世界同時ラジオデイズ宣言かよ。これをご説明するには、「不都合な真実」とか、「人口減少社会」といった大きな問題を根本から考えるための深慮遠謀について語らなければならぬ。畢竟するに、これらの大きな問題の根っこにあるのは、自然のリソースを無闇に消費しまくってきた経済合理主義的な近代というものに、地球も俺たちもすこし疲れてきたということではないか。「俺はもう疲れたよ」と、正直に誰かが言っべきなのである。

人間疲れたらどうすればいい? 答えは簡単である。休めばいいのである。しかし、ただ寝転がって瞑目して老いていくだけでは、曲がない。だいいち、それじゃ生きていくのか死んでいるのかよくわからない。ときには、口元に微笑みなど浮かべながら、草むらに寝転んでポップなナンバーを聞いて過ごした、あのラジオデイズを甦らせた

いものである。どうすりゃいいのだ。俺と俺の茶飲み友達は思索した。どつするって、じゃ、落語でも聴きながら考えてみようや。それが、そのまま新しいプロジェクトになった。そうやって、俺たちは街場に潜んでいた人情噺や、吟遊詩、ダイアローグの音を、蒐集しはじめた。蒐集して、ラジオや再生機の箱の中に丁寧に詰め込む作業が始まった。世界のどこかで、誰かが聴いてくれますように、と。

新しいオフィスには、柳家喜多八師匠の揮毫が額装されている。「清くけだるく美しく」。これが、俺たちのプロジェクトの最初のケルンとなったのである。

ラジオデイズプロデューサー 平川克美



『ラジオデイズ』は、文芸・対話・話芸を三本の柱に、声のもつ魅力に特化した音声コンテンツを制作し、ダウンロード販売するWebサイトです。

飄逸で含蓄のある随筆、瑞々しい感性の横溢する詩歌や小説の朗読、個性的な対話者たちの真摯な言葉の応酬から生まれる知的交歓、粋と人情の落語や講談などなど、オトナのお楽しみに耐える魅力的なコンテンツが満載です。

6月よりウェブサイトがオープン予定。

9月より本番サイトがスタートします、

乞ご期待!

第1回 オリンパスシンクろ寄席

日時 5月8日 午後7時開演
場所 お江戸日本橋亭

すべての落語は新作として生まれ、生き残ったものが古典に「なる……、そんな過酷な道に進んで身を捧げる人々がいます。それは新作落語の演者です。時代の流れから生み出された一席の斬を、口演を重ねながら書き換えていく。そんな現代の落語ばかりをコレクショントしました。毎回二人の演者が新作落語を2席ずつ競演します！

三遊亭円丈(さんゆうてい・えんじょう)

昭和の大名人 三遊亭圓生門下、現代の新作落語を率先して開拓した芸界きつての電子系ネットワーカー。スティックなまでに究極の笑いを追求する姿にはカリスマとしての風格が漂う。狛犬研究家、中日ドラゴンズのファン、パソコンに精通しPCゲーム作家でもある！



柳家小えん(やなぎや・こえん)

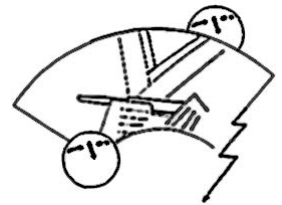
柳家小さん門下、新作落語にレトロな美学を与えた、芸界きつての電気系職人肌。天文にも詳しく、小惑星63330に「KOEN」と命名されるほど。雑俳は「つばな連」で、篝火舎心亭こと園田氏の弟子で、「川柳道場」では、半駄小手咲の名で選者も務める。



うるさ 明烏い話

連載第1回

ライター 本田久作



これから落語の歴史が書かれるなら、「円丈以前、円丈以後」という時代区分がなされるだろう。

誰が最初に言い出したのか知らないが、実になるほどな言説である。これとは逆に人をしみじみと納得させながら実はかなり眉唾なのが、「古典落語も生まれた時は新作だった」というフレーズだ。これには「だから、新作落語を作る者たちよ、卑屈になることはない」と続きそうな含みがある。そして本当に今でも「古典落語も生まれた時は」と呪文のように唱えながら落語創作に励む人がいる。だが、そういう態度こそ卑屈だ。

そもそも噺家を含めた落語フアンのひとつが「昔から落語の主流は古典」と思い込んでいること自体が間違っている。落語はその誕生からかなり長い間、すべて新作だったのである。噺家は誰もが皆新作をやった。自分で作れない噺家は作家に書いて貰ってまで新作を演じた。本家争いをすれば、新作落語こそ落語の本家だ。ところが明治初期になるとほとんど突然という感じで、自作自演から他作自演が主流を占めるようになった。これが「古典落語」である。古典落語は他人の作った新作落語を作者以外の噺家が高座にかけるといって実に新しい試みであったのだ。極論すれば、「古典落語」とは何百席とある落語の演目を指すのではなく、「他人の落語を俺もやる」というスタイルのことなのである。

だから「古典落語」が生まれた時、誰もそれを「古典落語」とは呼ばなかった。「古典落語」は昭和になってから生まれた新語で、これほど「古典」と称するのにふさわしくない言葉も珍しい。鶏と卵はどちらが先だった

のかは分からないが、落語ならば明らかである。新作が先で、古典が後だ。新作の方が古くて古典の方が新しいというこの言葉の矛盾が混乱の元となっている。もしも「他人の落語を俺もやる」というスタイルを「古典落語」ではなく「パクリ落語」と呼んでいたら現状は変わっていただろう。そんな体裁の悪い名前の落語をやるにはよほどの才能と勇気がいるからだ。「俺ならこの落語をオリジナルよりも面白くできる」という自信と自負がなければ「パクリ落語」は高座にはかけられない。だが、「古典落語」なら自信も工夫も新たな解釈もなくてもできる。「古典」といっても重々しい言葉は、それほど馬鹿げた権威を持っている。

落語の歴史を円丈以前と以後に区切るのは、円丈によって新作落語の方法論が天動説から地動説ほどに変わったからだ。だが、私にはもうひとつ感じるところがある。それは、無反省にただ繰り返されることだけが目的で演じられている「パクリ落語」に対する円丈の怒りである。円丈はつい最近古典復帰を宣言するまで、意地のように新作落語だけを高座にかけてきたが、円丈から多大な影響を受けた円丈チルドレンたちはその間古典もやり続けてきた。そして彼らの演じる古典落語は先人の財産を受け継ぎながらも、決して無反省な「パクリ落語」ではなかった。何故なら彼らは円丈チルドレンだからだ。円丈は新作落語の改革者としてだけいるのではない。落語史を円丈以前以後に時代区分する説に与みする所以である。

略歴

- 落語、漫才など新作日本関係の賞を総なめしている1999生まれの業界注目の新進作家
- 2002 落語「仏の遊び」国立演芸場日本募集佳作
- 2003 落語「蛙の子」夢丸新江戸噺審査員特別賞
- 2004 落語「玉手箱」国立演芸場日本募集優秀作
- 2004 落語「儂の葬式」落語協会優秀賞
- 2005 漫才「借金」国立演芸場日本募集佳作
- 2005 落語「按摩の夢」落語協会優秀賞
- 2006 落語「幽霊蕎麦」落語協会優秀賞

第1回 ラジオデイズ落語会

日時 5月18日 午後7時開演
場所 Live Cafe Again 武蔵小山

江戸時代から明治時代に作られ、数多の噺家によって高座にかけられ、時を経て世相に洗われて、そして語りつがれてきたのが古典落語。それを自家薬籠中に演じきる現代の噺家たち！ 人情の機微に触れ、免疫力増進の涙と笑いの宝庫、至福の話芸の真剣勝負。開口一番は毎回真打目前の二つ目さんをお願いします。

柳家小ゑん(やなぎや・こえん) ※↓右頁参照

柳家喜多八(やなぎや・きたはち)

学習院大学経済学部卒。十代目柳家小三治に入門。滑稽噺も人情噺も『愛』をもってこなす実力派。「清く、気だるく、美しく」を地でいく、無愛想で脱力した「出」とは裏腹の、気合の入った高座に竹馬履いて屋根上がつちゃって落語ファンが目下急増中。



三遊亭遊雀(さんゆうてい・ゆうじやく)

柳家権太楼に入門、平成18年10月、三遊亭小遊三入門となり、現在に至る。古典ネタを得意とし、得もいわれぬ大らかな踏みはずし感が多くのファンを魅了してやまない。趣味は旅と乗り物。



古今亭菊可(ここんてい・きくか)

お囃子 松本優子(まつもと・ゆうこ)
太鼓 初音家左吉(はつねや・さきす)

「朝の甘みは乙だよ」

食物にみる落語の時代考証

「明烏」のなかでも有名な、甘納豆を食べるくだりの台詞である。「明烏」と言えば八代目桂文楽で、この文楽が「明烏」を高座にかけると甘納豆が飛ぶように売れたというのもこれまた有名な話だ。この甘納豆は江戸時代の庶民も当然食べていたものと思いきや、森銃三の『明治東京逸聞史』によると明治四十一年に東京で売り出されたものらしい。文楽は明治二十五年生まれだから、甘納豆売り出しのときは十六歳。文楽にとつて甘納豆は、実にモダンなお菓子だった、ということになる。今で言うなら、吉原に泊まった翌朝マロングラッセを食べるような気分だ。文楽は「明烏」のこのくだりを演じていたのかもしれない。

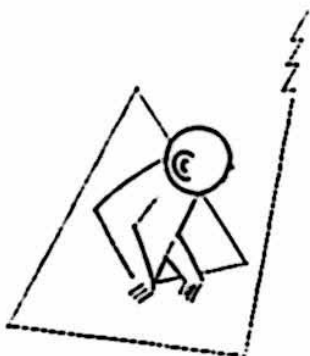
それを知ってか知らずか、志ん朝は「明烏」のなかで甘納豆の代わりに梅干しに砂糖をつけたものを食

べている。志ん朝が時代考証にこだわってこつこつ演出にしたのかどうかはわからないが、少なくとも梅干しと砂糖であれば「明烏」の時代設定を「古典落語の時代」にまで遡らせることができる。

このように「江戸時代にもあっただろう」と思っていたら、実は明治以後のものだったという食べ物意外と多い。「二人旅」は明らかに江戸時代を舞台にしているが、この噺のなかには酒の肴に生卵を注文するくだりがある。ところが、伊藤整の『日本文壇史』によると、日本人が生卵を飯にかけて食べはじめたのは明治以降のことらしい。珍しい食べ方だったからか、尾崎紅葉の『多情多恨』ではやはり酒の肴に生卵に醤油をかけたものを食べるシーンがある。

とここまで書いた時点で山本夏彦の『日常茶飯事』を読むと、江戸時代から続く栄太楼という日本橋の老舗の和菓子屋は甘納豆で売り出した、というくだりにぶつかった。であれば森銃三説は間違いで、甘納豆は江戸時代からあったということになる。ならば生卵に関して伊藤整の説ひとつだけでは信用できない。か

Q史一笑



明日もまた
ラジオの街で逢いましょう

ラジオデイズ落語会 (毎月第2金曜)

会 場 : Live Cafe Again (武蔵小山)
 開 演 : 19:00 (開場 18:30)
 木戸銭 : 2500円

第2回 6月8日(金) 入船亭扇遊 桃月庵白酒

第3回 7月13日(金) 瀧川鯉昇 入船亭扇辰 立川志の吉

※ご予約は、ラジオデイズ URL <http://radiodays.jp> より

オリンパスシンくる寄席

会 場 : お江戸日本橋亭
 開 演 : 19:00 (開場 18:30)
 木戸銭 : 2000円

第2回 6月28日(木) 昔々亭桃太郎 古今亭錦之輔

第3回 7月4日(水) 林家しん平 春風亭栄助

※ご予約は、オフィス M's 03-3999-3225 まで

#ラジオの街で逢いましょう#

ラジオデイズでは、声と語りの魅力を求めて、ラジオ番組制作・放送しています。それが深夜のトーク番組『ラジオの街で逢いましょう』です。
 毎回、さまざまな分野でご活躍中の個性的なゲストをお迎えして、その方ならではのエピソードや深みのあるお話をおうかがいしていきます。
 放送：ラジオ関西 毎週火曜日の深夜、24時半から午前1時まで。

これまでのラジオの街の深夜のお客様

(敬称略) ()内は放送日

- 第1回 柳家小ゑん(落語家) (4/3)
- 第2回 大友浩(元「かわら版」編集長、演芸研究家) (4/10)
- 第3回 関川夏央(作家) (4/17)
- 第4回 神田茜(講師) (4/24)
- 第5回 大西ユカリ(歌手) (5/1)
- 第6回 旭堂南海(講師) (5/8)
- 第7回 佐藤嘉尚(元「面白半分」編集長、編集者、エッセイスト) (5/15)
- 第8回 西江雅之(文化人類学・言語学) (5/22)
- 第9回 小池昌代(詩人・作家) (5/29)

パーソナリティは、ラジオデイズのプロデューサーの平川克美、菊地史彦、ディレクターの大森美知子、そして大阪は140Bのスーパーマルチエディター江弘毅が務めます。アシスタントは、五十川藍子と浜菜みやこ。4月放送分は、たぐいまれなラジオデイズのデザイナーサイトにて、ストーリーミング放送中です。真夜中の語らいに、ぜひ耳を傾けてみてください。

<http://www.radiodays.jp/ja/index.html>

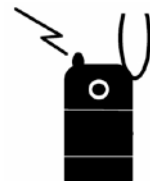
オリンパスシンくる寄席の“楽屋口(^ 0 ^)”

シンくる寄席オリジナルコンテンツ“楽屋口(^ 0 ^)”が携帯電話からお楽しみいただけます。
 まずは、下の2次元バーコードを携帯のカメラで写してあらかじめ無料画像認識アプリ Sync R (シンくる) をダウンロードしてください。



または <http://gwmj.jp> (オリンパスのシンくる公式サイト) に空メールを送信すると、ダウンロード先 URL が記載されたメールが返信されてきます。

つぎに、Sync R (シンくる) アプリを起動して、下記のマークを携帯のカメラで撮影して保存・送信すればOK。(下記、オリンパスシンくる寄席のチラシのマークも同様)



このとき、それぞれのマークの全体が入るように、ピントが合うところまで離して撮るようにするのがスムーズにダウンロードするコツです。どうぞ、お試しあれ!

シンくる (Sync R) とは? オリンパス株式会社の開発による先進の画像認識技術を応用したカメラ付き携帯電話用アプリのこと。新聞・雑誌などの紙面やテレビ画面上の画像を撮影するだけで、モバイルサイトへのアクセスを可能にします。



上掲は、平川店長が最初の石を積み上げたときのラジオデイズのケルン・柳家喜多八師匠の揮毫。月刊ラジオデイズの零からのスタート、なにとぞご帰願のほど。

本紙カッター ありよしきなこ